付篇

吉田遺跡第Ⅰ地区Ｂ区の未報告図面について

田畑　直彦

１　はじめに

当館は平成４年度に、吉田構内への統合移転時に発掘調査が行われた吉田遺跡第Ⅰ区Ｂ区の報告を行った[1)]。その際、遺構図に関しては断面図は存在したものの、平面図が全て行方不明であったため、断面図は基本層序の提示にとどめ、遺物中心の報告を行わざるを得なかった。その後、平成９年４月に至り、教育学部地理学準備室から統合移転時の発掘調査の記録類が新たに発見され、この中に吉田遺跡第Ⅰ地区Ｂ区の平面図等が含まれていた。この発見により、第Ⅰ地区Ｂ区の調査区とおおよその位置が明らかになった。以上の新たな発見を受け、以下では、これらの図面について追加報告を行いたい。

Fig.38　第Ⅰ地区B区位置図

2　平面図

原図は縮尺1/100の平板図である。図の下に「第Ⅰ遺跡第２次緊急調査第１区－第４区」平川吉田遺跡第Ⅰ地区道路建設予定地　Ｓ41　11　20」と記載されている。『山口大学構内吉田遺跡調査概報』（ガリ版刷り）によれば、第Ⅰ地区Ｂ区の調査期間は昭和41年10月15日から同月30日までとされるが、出土遺物の注記には昭和41年11月14日から24日までのものがあるため、実際には昭和41年11月に調査されたと考えられる。調査区は一部未記載であるが、各遺構にはＰ１～Ｐ19、１～32の名称が付されているほか、「住居址」１基がある。遺構については縮尺1/10の平面図も作成されている。Fig. 40は1/10の平面図との合成図をトレースしたものである[2)]。この図と年報ＸⅠのPL. 41記載写真を比較すると、調査区の形状、遺構の名称・位置が概ね一致することから、上記の図は第Ⅰ地区Ｂ区の図面と断定できる。

縮尺1/100の平板図には「教養部校舎」の一部が記載されているが、この校舎は現在の共通教育本館棟北東隅と考えられる。同平板図には方位も記載されているが、図を建物方向に合わせると、調査区は総合図書館敷地に位置することとなる。同平板図に記載されている「道路建設予定地」を参考に、同平板図記載の方位を合わせたものがFig. 39である。調査区

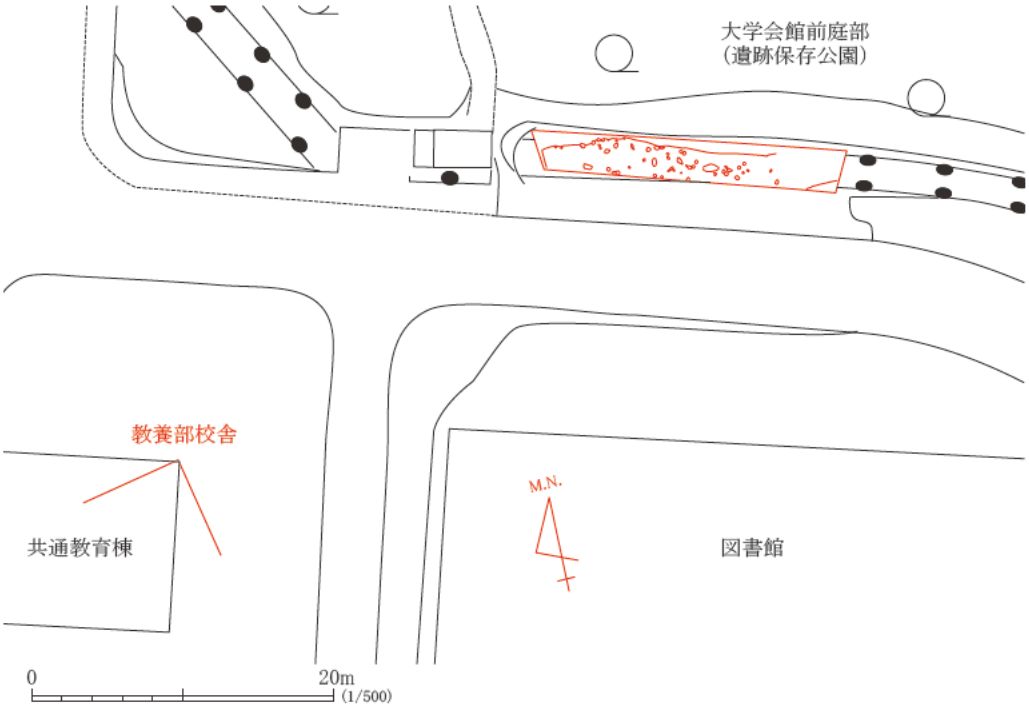

Fig.39　第Ⅰ地区B区詳細位置図

は構内道路の北側の水路部分に位置することになるが、年報ＸⅠのPL.41をみると、調査区にほぼ平行するように崖面がみられることから、調査区の位置は概ね上記の位置と断定できる。

３　断面図

現在、埋蔵文化財資料館では調査区北壁断面図及び、調査区内東壁の断面図を保管している。今回は、調査区北壁断面図と東壁（ａ－ｂ、ｃ－ｄ間）について報告する。

基本層序については、以下のように整理した。層名は北壁記載のものである。なお、断面図には標高の記載がないため、詳細は不明である。

第Ⅰ層：造成土もしくは耕土か　層厚約１～29㎝、第Ⅱ層：褐色土　弥生土器、土師器、須恵器を含む（包含層Ⅰ）層厚約13～59㎝、第Ⅲ層：暗褐色粘質土　弥生土器を包含する（包含層Ⅱ）層厚約３～37㎝、第Ⅳ層：地山。

第Ⅰ層については図に記載はないが、調査時に包含層が露出していたとされる状況から造成土もしくは耕土と考えられる。第Ⅱ層は第Ⅰ地区Ａ区[3)]の第Ⅱ層、第Ⅲ層は同区第Ⅲ層、第Ⅳ層は同区第Ⅴ層に相当する。なお、第Ⅳ層について層名の記載はなかった。

包含層は北から南へ緩やかに傾斜して堆積する。第Ⅲ層は調査区西端から約2.7ｍの地点から東側に堆積し、その東側には遺構埋土の可能性がある落ち込みがみられる。上記を除く遺構の多くは北壁断面図を見る限り、第Ⅴ層を遺構面としていたようである。大学会館環境整備に伴う試掘調査[4)]では、地山面が北から南へ傾斜しており、調査区南部では包含層の堆積が確認されていることから、第Ⅰ地区Ｂ区は同Ａ区同様、丘陵裾部に立地していたと考えられる[5)]。

４　遺構

Ｐ１～Ｐ19、１～32、「住居址」１基が検出された。１～32のうち、遺構の平面形・大きさから、20は土壙であり、他は柱穴とみられる。「住居址」には弥生土器片の出土位置が書き込まれているが、該当する遺物は確認できない。また、他に「住居址」に関する記載がないため、この遺構が竪穴住居跡であったかどうかを含め、詳細は不明である。遺構のうち、最も多く検出されたのは柱穴である。北壁断面を見ると、深さは最も浅いＰ14が約３㎝、最も深いＰ10が約26㎝で、他は10～20㎝前後である。前述のように、これらの柱穴は地山を遺構面としているようであるが、大学会館環境整備に伴う試掘調査[6)]では包含層から掘り込まれた柱

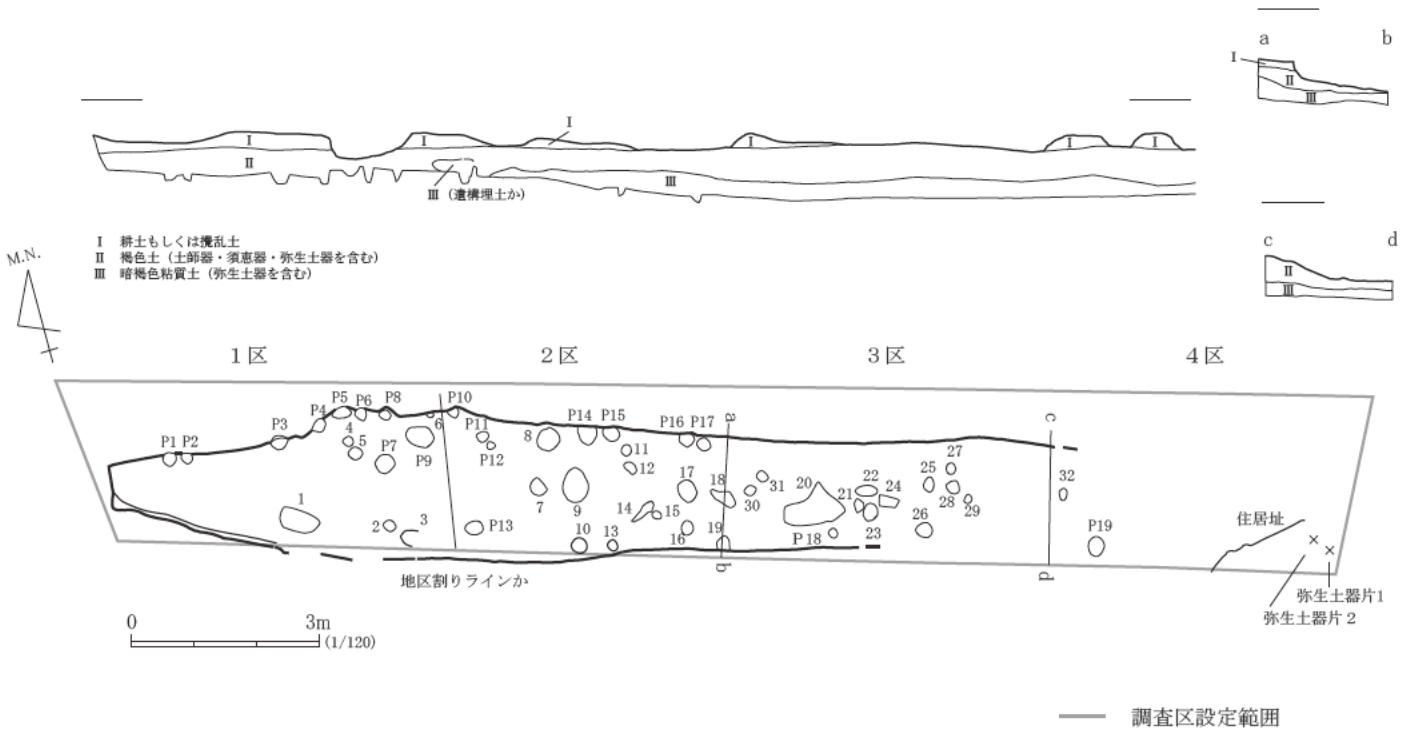

Fig.40　第Ⅰ地区B区平面図・断面図

穴も確認されていることから、複数時期の柱穴が存在した可能性がある。なお、年報ＸＩのFig.77－61（古墳時代前期甕底部）は「Ｓ41.11.24　吉田　第ＩＢ・2区N0.18の中」との注記があることから、２区18から出土した土器と断定でき、この柱穴は当該期のものであった可能性がある。また、報告されている遺物は弥生時代～古墳時代中期のものが多く、古代以降の遺物が僅少であるため、当該期の遺構が主体であった可能性が高い。

５　おわりに

以上、第Ⅰ地区Ｂ区の未報告図面について報告を行った。第Ⅰ地区Ｂ区では柱穴を主体とする遺構が多数検出された。詳細は不明な点が多いが、報告された遺物から推測すると、これらの遺構は弥生時代～古墳時代中期を主体としていた可能性が高い。標高等に不明な点が多いため、第Ⅰ地区Ａ区同様、今後、調査区周辺の調査による検証が待たれる。

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第Ⅰ地区Ｂ区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＩ』、1993年）

2）縮尺1/100平板図と縮尺1/10平面図とは遺構の形状、位置が完全には一致しないが、遺構については縮尺1/10平面図をトレースし、調査区については縮尺1/100平板図をトレースした。ただし、遺構14・15については、写真との対応関係から、縮尺1/100平板図が正しいと考えられるので、この箇所のみ縮尺1/100平板図をトレースした。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「付篇　吉田遺跡第Ⅰ地区Ａ区の未報告図面について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＸＩ、2016年）

4）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）

5）前掲注3）文献では第Ⅰ地区Ａ区を谷の肩部に立地するとしたが、旧地形に不明確な点があるため、丘陵裾部に訂正する。

6）前掲注4）文献